

## 第 41 期第 3 回理事会議事録

日 時：2020 年 7 月 27 日（月） 13 時 30 分～19 時 15 分

会 場：日本気象学会事務室（Web 会議）

出席理事：佐藤 薫，橋田俊彦，青柳曉典，池上雅明，植田宏昭，榎本 剛，小池 真，齋藤篤思，佐藤正樹，塩谷雅人，竹見哲也，坪木和久，中村 尚，橋本明弘，早坂忠裕，平松信昭，廣岡俊彦，堀之内 武，三好建正，渡部雅浩，  
以上 20 名（理事数現在 20 名）

出席監事：吉田 聡，以上 1 名

その他の出席者： 勝山 税，志村 隆，横手嘉二（事務局）

### 議 題

#### 1. 協議事項

##### 1) 会員の新規加入等について

新入会 42，退会 40 を全会一致で承認した。2020 年 7 月 10 日現在，会員数 3,330 名で個人会員は 3,132 名。

##### 2) ウィズ/ポスト・コロナ時代の大会のあり方検討 WG 及び財政改善検討 WG の設置について

全会一致で承認した。

##### 3) 松野賞受賞者選考規程の改正について

一部修正のうえ，全会一致で承認した。

#### 2. 報告事項

##### 1) 各委員会からの引継ぎ 別紙参照

##### 2) 業務執行理事の報告

庶務担当執行理事・・・以下の内容が報告された。

##### i) 転載許可

##### ①申請者：放送大学教育振興会

転載元：

- ・気象研究ノート，第 207 号(2005)，松尾敬正・藤吉康志：第 7 章雪片等の融解メカニズム，81-114，図 7.17 の下図
- ・天気，第 47 巻 1 号(2000)，和田光明・中村則之：成熟期の積乱雲，3-4，写真 1 の(a)と(d)
- ・気象研究ノート，第 208 号(2005)，長谷江里子・新野 宏：3-2 1999 年梅雨期の大規模場の特徴，37-51，図 3.2.6 の「925hPa」と「700hPa」
- ・気象研究ノート，第 133 号(1977)，河村 武：都市気候の分布と実態，26-47，第 4 図の「5h」
- ・天気，第 50 巻 8 号(2003)，榊原保志・北原祐一：日本の諸都市における人口とヒートアイランド強度の関係，625-633，第 8 図
- ・天気，第 35 巻 1 号(1988)，栗田秀實・植田洋匡・光本茂記：弱い傾度風下での大気

汚染の長距離輸送の気象学的構造, 23-35, 第2図(b)

転載先: 改訂版 はじめての気象学 (2020年3月発行予定)

②申請者: 株式会社日本入試センター

転載元: 「気象科学事典」(日本気象学会編) P466 藤田スケール

転載先: 理科6年冬季講習入試実戦演習01MU (2020年12月発行予定)

③申請者: 弘前大学農学生命科学部 伊藤大雄

転載元: 天気, 第63巻1号(2016), 草薙浩: 平年日降水量時系列のクラスター分析による日本の9気候地域区分の提案, 5-12, 第4図

転載先: 農業気象学入門 (文永堂出版株式会社 2020年8月発行予定)

ii) 後援名義等使用依頼受付

①名称: 第37回エアロゾル科学・技術研究討論会

主催: 日本エアロゾル学会

期日: 2020年8月26日~28日

場所: 熊本県立大学

名義: 共催

②名称: 第48回可視化情報シンポジウム

主催: 可視化情報学会

期日: 2020年9月24日~26日

場所: かごしま県民交流センター

名義: 協賛

③名称: 降雪・積雪系オンラインワークショップ2020

主催: 降雪・積雪系オンラインワークショップ2020実行委員会

期日: 2020年7月6, 7日

場所: オンライン開催

名義: 共催

④名称: 第18回高校生・高専生科学技術チャレンジ (JSEC2020)

主催: 朝日新聞社, テレビ朝日

期日: 2020年12月13日(表彰式)

場所: 日本科学未来館

名義: 後援

⑤名称: 第38回レーザーセンシングシンポジウム

主催: レーザーセンシング学会

期日: 2020年9月3, 4日

場所: オンライン開催

名義: 協賛

会計担当執行理事・・・以下の内容が報告された.

・2020年5, 6月分の収支及び現預金検査報告.

・補助金申請.

第32回日本気象学会夏期特別セミナー(2020年9月5~6日, 仙台を拠点としたオンライン開催)

企画調整担当執行理事・・・以下の内容が報告された。

- ・総会議決等に対する意見と対処について会員サイトへのアップ.
- ・米国気象学会 (AMS) との覚書 (MOU) 締結を契機とした英語サイト (学会概要) の更新.

### 3) 委員会報告

講演企画・・・以下の内容が報告された。

- ・2020 年度春季大会の実施報告. 予稿集発行 (会員サイトで公開) により大会開催とした.
- ・2020 年度秋季大会の講演申し込み状況.

天気編集・・・以下の内容が報告された。

- ・Vol.67 No.5, 6 (2020 年 5, 6 月)の掲載記事と, Vol. 67 No.7, 8, 9 (2020 年 7, 8, 9 月)の予定記事の報告.
- ・天気 Twitter のフォロワーが 330 人に達した.

気象集誌編集・・・以下の内容が報告された。

- ・Review Paper について, 一般からの投稿を受け付けるように変更し, 一般からの投稿についての Article Processing Charge(APC)は原則として無条件での減免はしないこと、Notes and Correspondence のうち Comment and Reply に関しては APC を徴収しないことが提案され, 理事会は全会一致で承認した。

SOLA 編集・・・以下の内容が報告された。

- ・論文の投稿状況.
- ・2019 年の SOLA のインパクトファクターは 1.632 であった.
- ・掲載料免除申請 1 件を受理.

気象研究ノート・・・以下の号の編集を進めていることが報告された。

- ・242 号「極端気象の統計学」
- ・243 号「竜巻を識る」

表彰関連・・・以下の内容が報告された。

- ・「堀内賞」「正野賞」「山本賞」「小倉奨励賞」の推薦について, 各賞の候補者推薦委員会より候補者が提示され, 推薦理由について確認を行った. 今後, 全理事の投票により受賞者を決定する.
- ・堀内賞候補者推薦委員会からの報告を基に, 候補者の領域・分野について議論し, 委員会として必要ならば受賞者選定規程の改正を提案することとした. また, 今回の堀内賞候補者については, 2 名推薦することを再度堀内賞候補者推薦委員会で確認することとした.

気象災害・・・以下の内容が報告された。

- ・令和 2 年 7 月豪雨による災害に対する科研費 (特別研究促進費) について調整対応中.
- ・防災学術連携体に新しい研究交流・連携推進策として WEB 研究会が立ち上がり, 第 1 回 (6 月 23, 24 日) は気象学会が担当して, 「近年の異常気象と地球温暖化, 今年の夏の備えも含めて」をテーマに, 中村理事, 橋田副理事長が話題提供と質疑・意見交換を行った.
- ・防災学術連携体が令和 2 年 7 月豪雨に関する緊急集會を 7 月 15 日にオンラインで開催

し、気象学会から竹見理事が「梅雨前線に伴う豪雨について」と題して気象学的な観点から話題提供をした。

- ・第5回防災推進国民会議（広島市で開催）において、10月3日に日本学術会議と防災学術連携体が連携して、第10回防災学術連携シンポジウム「複合災害への備え—Withコロナ時代を生きる—」を開催予定。
- ・第11回防災学術連携シンポジウムは、日本学術会議と防災学術連携体の共催で2021年1月14日に開催し、東日本大震災からの十年の活動を振り返り今後の取組みを発表する予定。あわせて、東日本大震災十周年「防災学術連携体58学会の記録」の冊子を作成して参加者と関係各所に配布する計画。

教育と普及・・・以下の内容が報告された。

- ・気象サイエンスカフェの開催報告。会場に加えてオンラインでも開催し、オンラインからは普段の倍の参加があった。音声聞き取りにくいなどの問題があった。
- ・ジュニアセッションの開催報告。
- ・夏季大学の進捗状況。オンライン開催。

国際学術交流・・・以下の内容が報告された。

- ・7月1日にAMSとMOUを締結した。

#### 4)理事長報告

- ・日本学術会議の報告「地球惑星科学分野における科学・夢ロードマップ（改訂）2020」および提言「第24期学術の大型研究計画に関するマスタープラン（マスタープラン2020）」、「持続可能な人間社会の基盤としての我が国の地球衛星観測のあり方」、「災害が激化する時代に地域社会の脆弱化をどう防ぐか」、「初等中等教育及び生涯教育における地球教育の重要性：変動する地球に生きるための素養として」に関する報告。

以上について、議事録を作成し、理事長および監事が記名押印する。

2020年10月5日

公益社団法人日本気象学会

理事長 佐藤 薫

監事 鈴木 靖

監事 吉田 聡

## 別紙

第 41 期理事会への引き継ぎ事項として、各担当理事から第 40 期での実施事項と懸案事項についての説明が行われた。主な内容は以下の通り。

企画調整…第 40 期では、支部長会議の開催、学会収支改善、会員サービス向上の取り組みを進めてきた。第 41 期は、有識者会議の開催、経費削減、会員数の長期的な減少への対策などに取り組む。

講演企画…第 40 期では、大会講演予稿集の完全電子化、大会参加費の見直し、事務補助員の雇用による委員会の事務局体制の強化などを行った。第 41 期は、大会の運営に関する見直し、大会参加申し込み受付システム、春季大会の JpGU 大会への合流などについて検討する。

天気編集…第 40 期では、第 66 巻（2019 年）第 1 号から、論文・短報・解説の J-stage 掲載を開始した。2019 年 5 月 28 日より「天気」ツイッターを開始。収支改善に向けた取り組みを引き続き継続。まずは冊子体を不要とする会員を募ることから始める。

気象集誌編集…第 40 期では、2018 年 61 編、2019 年 66 編、2020 年 24 編（4 月号まで）の論文を発行した。Impact Factor にて 2017 年に 5.023、2018 年に 3.318 という評価を得た。41 期では、引き続き通常号の刊行と特別号の出版を行う。科研費採択に伴う施策を実施、特に、JMSJ と SOLA の連携強化を図る。

SOLA 編集…第 40 期では、2018 年 36 編、2019 年 59 編、2020 年（6 月 7 日現在）16 編の論文を発行した。Impact Factor にて 2017 年に 1.069、2018 年に 1.078 という評価を得た。第 41 期では、多様な分野をカバーする国際的な編集委員体制の堅持、科学研究助成事業（科学研究補助金、研究成果公開促進費）による JMSJ との連携強化などに取り組む。

気象研究ノート編集…第 40 期では、236～241 号を刊行した。会員向けに刊行済み号の PDF 無料ダウンロードサービスの準備を進めた。引き続き、他の出版物から転載する図のキャプションへの適切な記載や、必要な転載許可を得ることを徹底する。

学会賞候補者推薦…第 40 期では、2018 年度に 2 名、2019 年度に 1 名の学会賞候補者を理事会に推薦した。近年の推薦者の減少傾向の対策として、過去の受賞者個人宛に推薦依頼文書を送付するとともに、委員会内でも積極的に候補者を探す努力をしている。また、他の賞との整合性については引き続き留意する必要がある。

藤原賞候補者推薦…第 40 期では、2018 年度に 2 名、2019 年度に 1 名の藤原賞候補者を理事会に推薦した。推薦者の減少の対策は第 41 期でも引き続き留意する必要がある。

岸保・立平賞候補者推薦…第 40 期では、2019 年度、2020 年度それぞれ 1 件の候補者を理事会に推薦した。創設以来、推薦数が少ないため、対象となる業績について、潜在的な候補者を探す努力を継続する。

堀内賞候補者推薦…第40期では、2019年度に1名、2020年度に2名を候補者として理事会に推薦した。気象学の発展に伴い、堀内賞の対象とする分野が、気象学の中心的な存在になっていることが散見される。引き続き、他の賞との整合性を図る必要がある。

正野賞候補者推薦…第40期では、2019年度、2020年度にそれぞれ2名の候補者を理事会に推薦した。選考においては、論文数、被引用回数を重要な評価の基準としたほか、国際的な評価、科学的重要性にも留意した。被引用回数の調査は、委員会の大きな負担となっているため、第40期では、募集の際に被引用数の記載を要請することを検討する。

山本賞候補者推薦…第40期では、2019年度、2020年度にそれぞれ2名の候補者を理事会に推薦した。2019年度までは多数の推薦があったが、2020年は再び減少した。第41期では、推薦増に向けた施策をとる必要がある。

小倉奨励賞候補者推薦…第40期では、2018年に1名、2019年に3名の候補者を理事会に推薦した。2019年から、小倉義光・正子基金の運用益を副賞等に活用することとし、「小倉奨励賞」と名称を改めた。推薦者は3名までとなっているのに対し、応募者数は十分とは言えない。また、調査研究の業績に比べると、気象教育の業績についての評価は定量化が難しいため、評価方法について検討する必要がある。

松野賞候補者推薦…第40期では、2018年春季大会で2名、2018年秋季大会で1名、2019年春季大会で5名、2019年秋季大会で5名の候補者を理事会に推薦した。2020年春季大会では、会場開催がなかったため、松野賞は中止した。2019年度の春季大会から、ポスター発表を含める、受賞者数を増やすなど、規定の修正を行った。第41期では、応募者数の増加に向けた検討、副賞の検討、オンライン開催が予定されている2020年秋季大会の松野賞をどうするかなどが課題である。

部外表彰等候補者推薦…日本学術振興会賞、文部科学大臣表彰等、部外の表彰について学会に推薦依頼、案内が来たものについて学会HPや「天気」に掲載している。各賞とも範囲が広い一方、それぞれの性格も差異があるためか推薦が少なく、推薦者無しとなった賞も増えている。受賞者を増やし学会のステータスを上げるためにも広く積極的に推薦することが必要である。

名誉会員推薦…第40期では、新たな候補者の絞り込みができず、推薦を行わなかった。

第41期では、候補者リストを更新し、名誉会員の推薦へと進めたい。

学術…第40期では、第39期から取りまとめた報告書「地球観測の強化に向けて日本気象学会は何をなすべきか—地球観測のあり方について—」をふまえて、2018年秋季大会でシンポジウム「未来を拓く気象観測のあり方」を開催した。日本学術会議の提言「マスタープラン2020」に、「航空機観測による気候・地球システム科学研究の推進」を提案し、重点大型研究計画に選定された。第41期では、引き続き文科省の「大型プロジェクトの推進に関する基本構想ロードマップ2020」の審査が進行しており、積極的にそのサポートにあたる。

地球環境問題…第40期では、JST研究開発戦略センターより、隔年発行の「研究開発の俯瞰報告書」執筆者推薦依頼に対応した。朝倉書店より「異常気象」をテーマとした啓

蒙書の出版企画が提案され、対応中。第 41 期では、春季大会、あるいは秋季大会に合わせて、地球環境関連の講演会、またはシンポジウムの実施を検討する。

気象災害…第 40 期では、メソ気象研究会と共催での研究会の開催や、防災学術連携体等の関連団体主催のシンポジウム等への参画、地球惑星連合環境災害対応委員会との連携、特別研究促進費による緊急研究に参画するなどの連携を深めた。今後も、防災学術連携体への対応を柱に、独自の研究活動や、気象庁・気象予報士会との連携強化を進めていく。

気象研究コンソーシアム…気象庁との共同研究契約を中心として、データ利用などについての検討と支援を行っている。第 40 期では、運営委員会を 2019 年に 1 回、2020 年に 2 回、運営委員会を開催した。

教育と普及…第 40 期では、夏季大学、公開気象講演会、気象サイエンスカフェ、ジュニアセッション等を通じた普及活動を行った。気象教育について執筆中の気象研究ノートは 2020 年内の発行を目指す。引き続き、ホームページによる気象教育・普及啓発活動、国際地学オリンピック開催支援を行う。

国際学術交流…第 40 期では、第二回小倉特別講義の開催、国際学術交流助成の実施の他、米国気象学会との間に MOU を結ぶことを検討した。第 3 回アジア気象会議の共同開催はコロナウイルスの感染拡大が広がったため、相互の行き来が可能になるまで見合わせる。

電子情報…コンテンツ管理システムの導入や会員サイトの運用、クラウド化に伴って、学会の情報基盤を管理する委員会として、大きな責任を負っている。第 41 期は会員サービスの向上を進め、クラウドの活用を推進し、経費削減に貢献しながら学会活動の活発化に寄与する活動を行う。その際、委員の負担が過大にならないように、委員会の構成や役割分担を見直し、アルバイトを活用していく必要がある。

人材育成・男女共同参画…第 40 期では、2018 年秋季大会においてワークライフバランス（WLB）勉強会、2019 年秋季大会において WLB を考える会～女性会員の集いとのコラボ～の実施等の活動を行った。委員会の名称は、以前から長いという指摘がある。第 41 期は、これまでの活動を精査したうえで、目的を再定義し、名称を変更する。

庶務…定常業務として、各種会議の司会および議事録の作成の補助を行う。また、事務局、会計担当理事と連携して、学会の円滑な運営に必要な作業を行う。

会計…定常業務として、現預金の監査と会計報告を毎月行う。また、事務局、庶務担当理事と連携して、学会の円滑な運営に必要な作業を行う。